

茨城県結城郡八千代町

旧中結城小学校庭遺跡

—理化工業(株)敷地内の調査—

2002

八千代町教育委員会

1.はじめに

この調査は、理化工業（株）の工場建設に伴い実施された発掘調査である。この地域は、旧中結城小学校庭遺跡内に所在しているので、同社の開発申請に基づき現地を確認したところ、今回の開発区域は旧中結城小学校の2棟の校舎が工場として利用されており、校舎間の空き地からは土師器片が採集された。そこで八千代町教育委員会は、工場の敷地内ではあるがまだ遺跡が残されていることが考えられたので、遺構の有無を確認するため試掘調査を実施した。

試掘調査は、平成12年5月11日に実施した。旧校舎間の空き地に3ヶ所のグリット（4×2m）を設定し、約40cm掘り下げたところでローム面を確認した。擾乱を受けている部分もあるが、2ヶ所のグリットから方形の遺構の隅部及びピット3基を発見し、遺構が存在することが確認された。

試掘調査の結果に基づき理化工業（株）と埋蔵文化財の保存について協議を進めたところ、開発区域の面積は約1,448m²で、2棟の旧校舎を取り壊し新たに工場を建設するものであるが、遺構に掘削が及ぶ基礎にかかる部分を調査区域とし、記録保存を図るために発掘調査を実施することになった。

発掘調査にあたっては、理化工業（株）のご協力をいただき、八千代町教育委員会が実施した。

例　　言

目　　次

1. 本書は、茨城県結城郡八千代町大字佐野字古屋敷1157	1. はじめに	例言	目次	1
-1. 字北沼1203-1に所在する旧中結城小学校庭遺跡の理	2.	遺跡の概要		2
化工業（株）敷地内における発掘調査報告書である。	3.	調査の概要		3
2. 調査は、理化工業（株）の工場建設に伴い、同社のご	4.	遺構と遺物		5
協力をいただき、平成12年7月29日から8月1日に	5.	まとめ		10
かけて八千代町教育委員会が実施した。				
3. 現地調査及び本書の執筆・編集は八千代町教育委員会				
生涯学習課の山野井哲夫が担当した。				
4. 本調査にかかる記録類及び出土遺物は、八千代町教育				
委員会が一括して保管している。				
5. 調査期間中、（株）浜屋組から重機及びプレハブにつ				
いてご協力をいただいた。				
6. 発掘調査において、下記の方々の参加ご協力をいただ				
いた。記して感謝の意を表す。（敬称略・順不同）				
鶴見貞雄　瀬澤　晃　　大谷昌良　　斎藤伸明				
赤井博之　佐久間秀樹　　青谷　好　　小野里家一				
渡辺定雄　草間和男　　高木栄一郎　　広瀬迪雄				
中山義典　内山　博　　秋葉通明　　為我井正				
塙原勝美　佐野史子　　新関博子				
		写真図版		
	1	遺跡・遺構		10
	2・3	遺構		11
	4・5	遺物		13

2. 遺跡の概要

旧中結城小学校庭遺跡は、旧中結城小学校の校庭から土器が出土したことから呼称された遺跡であるが、その範囲は南北 300m、東西 500m 以上に及ぶ広大な遺跡である。遺跡は、東側に鬼怒川の旧河道を臨み、北側を山川沼、南側を北沼に挟まれた標高 25~28m の舌状台地に立地している。遺跡中央部には南側から深い谷が入り込んでいる。現状は、台地の東端を南北方向に県道、台地の中央部を東西方向に町道が通り、台地の東側から北側にかけて宅地化されているが、遺跡の広い地域は畠である。時代は、当初奈良・平安時代と考えられていたが、今回の調査で縄文時代、古墳時代、中世に及ぶ複合遺跡であることが確認された。

旧中結城小学校庭遺跡周辺の地域には、多くの遺跡が確認されている。同じ台地上には、遺跡の北側に現在は墳丘が消失したが高さ約 4m の円墳であった山之神古墳（109）が存在していた。また台地の西側に谷津を隔てて奈良・平安時代の佐野丸山遺跡（107）、戸呂賦東遺跡（105）、その北側に縄文時代、奈良・平安時代、中世にかけての大山道西遺跡（127）が立地している。北沼を挟んで南側の台地一帯は、縄文時代を中心とした権現山遺跡（114）が立地する。遺跡の東側の鬼怒川底地には、鬼怒川の旧河道沿いの広い範囲に奈良・平安時代から中世にかけての瀬戸井上遺跡（110）、瀬戸井下遺跡（111）が立地している。

*参考文献

- ・「八千代町史 通史編」 八千代町町史編さん委員会 昭和62年
- ・「八千代町史 資料編Ⅰ」 八千代町町史編さん委員会 昭和63年
- ・「茨城県遺跡地図・地名表」 茨城県教育委員会 平成12年



第1図 遺跡位置図(茨城県遺跡地図より 1/25,000)

3. 調査の概要

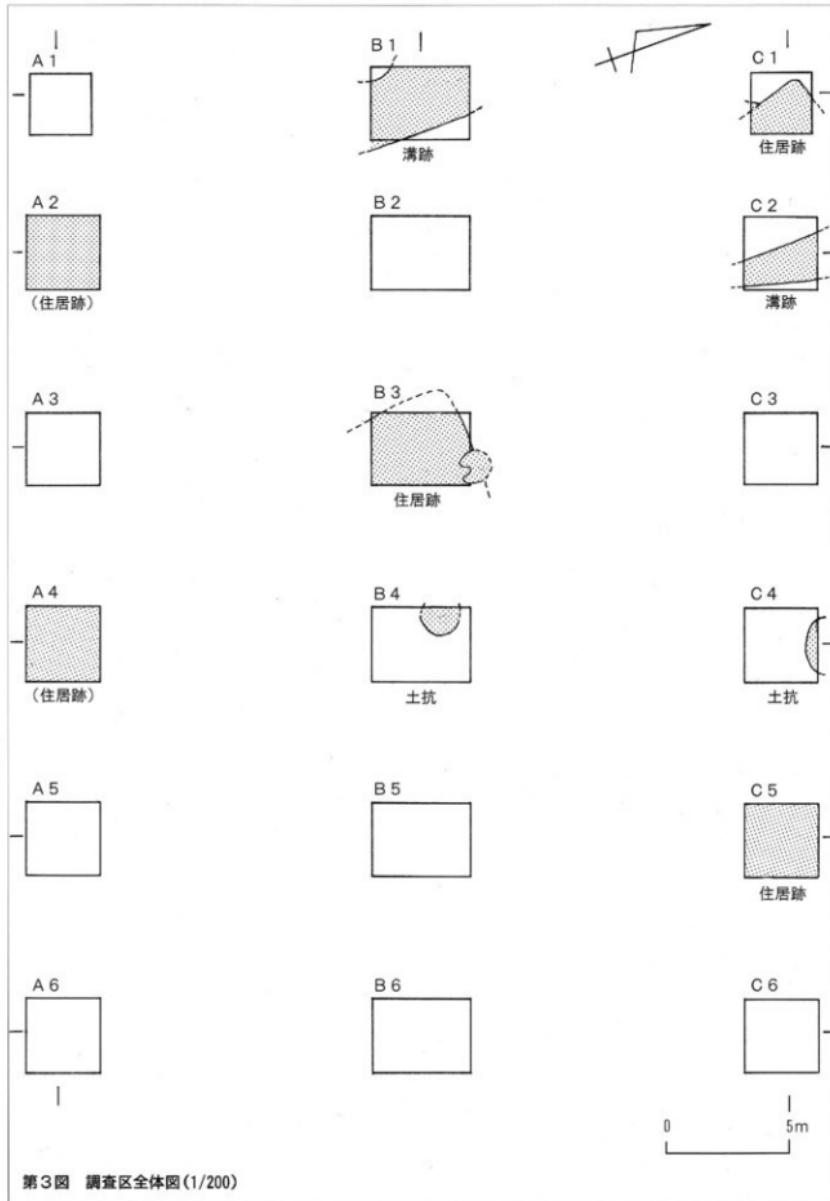
調査は、工場として使用されていた旧中結城小学校の校舎2棟を取り壊し、新たに工場用地として整地した後に実施した。調査区は、遺構に掘削が及ぶ基礎にあたる部分に、南側から北側へA・B・C、西側から東側へ1～6まで、計18ヶ所を設定した。各調査区の規模は、A1区とC1区が 2.5×2.5 m、A2区～A6区及びC2区～C6区が 3×3 m、B1区～B6区が 4×3 mで、調査面積は合計 174.5m^2 である。調査中にB1区とB3区の一部を拡張した。調査期間として実質確保できた日数は平成12年7月29日から8月1日までの4日間であった。

調査の結果、検出した遺構は竪穴住居跡3軒、土坑2基、溝跡2条の他、住居跡と推定できる覆土の範囲2ヶ所（2調査区）である。出土遺物は、縄文土器片、土師器、須恵器片、土師質土器片、石製品等で、コントナ3箱分が出土した。調査の経過は以下のとおりである。

- ・7月27日（木）：中結城小学校庭の標高（27.30 m）から調査現場に標高を移動（28.15 m）。
- ・7月28日（金）：調査準備、器材等を現場に搬入。
- ・7月29日（土）：調査開始。調査前の全景撮影、重機による表土除去、各調査区の遺構確認、A区及びC区の遺構確認状況撮影。
- ・7月30日（日）：B区の遺構確認状況撮影、A2区及びC1・2・4・5区の遺構調査。
- ・7月31日（月）：C1・2・4・5区及びB1・3・4区の遺構調査、調査区全測図作成。
- ・8月1日（火）：A2・4区、B1・3区、C2・5区の遺構調査、器材等片付け、調査終了。



第2図 遺跡地形図(1/5,000) ◇遺跡範囲 スクリントーン：調査区域



第3図 調査区全体図(1/200)

4. 遺構と遺物

本調査では、堅穴住居跡、土坑、溝跡を検出したが、各調査区は狭い範囲であったため、検出した遺構はいずれもその全体を確認することはできなかった。また、各調査区には所々に擾乱された部分が見られ、特にC区はすべての調査区の中央部に、旧中結城小学校の校舎の基礎石やその痕跡が残されていた。

遺構を検出した調査区は、18ヶ所のうちA2・4区、B1・3・4区、C1・2・4・5区の9ヶ所である。以下、各遺構について述べる。なお、遺構名は検出した調査区で表示した。また、遺構実測図は第4・5図、図版1~3に、出土遺物は第6図・観察表・図版4・5に示した。

A2区

A2区は、地表面から約35cm下で黒色土の覆土を確認した。調査区全面が覆土と判断され、中央部で南北方向に近代以降の擾乱（溝）によって分断されている。調査区の南辺に幅約1mのトレーナーを入れたところ確認面から約40cm下で床面と思われる硬化したローム面に達し、柱穴と推定される一辺約40cm、深さ約30cmの方形のピット2基を確認した。遺物は、確認面から須恵器片(1)、覆土内から土師器壺、甕が出土した。土師器には、黒彩を施した壺や輪圧痕のある甕の底部(2)が出土している。

本遺構は、遺構全体の形状が不明のため断定はできないが、床状の硬化面や柱穴と推定されるピットの確認状況から、堅穴住居跡と推定される。時期は、出土した土器から古墳時代後期のものと考えられる。

A4区

A4区は、地表面から約40cm下で調査区全面が黒色土の覆土であると判断した。確認面で部分的にローム土の範囲及び焼土の範囲が認められた。覆土を約40~50cm掘り下げて試みたが、遺構の底面の状況は確認できなかった。遺物は土師器壺、甕が多く出土した。他に土師質土器片や黒曜石とチャートの剥片、炭化した果物（桃か）の種子が出土している。土師器には、内面に赤彩、底面に「×」の刻書、底部縁に輪圧痕のある壺(3)や黒彩を施した壺が出土している。

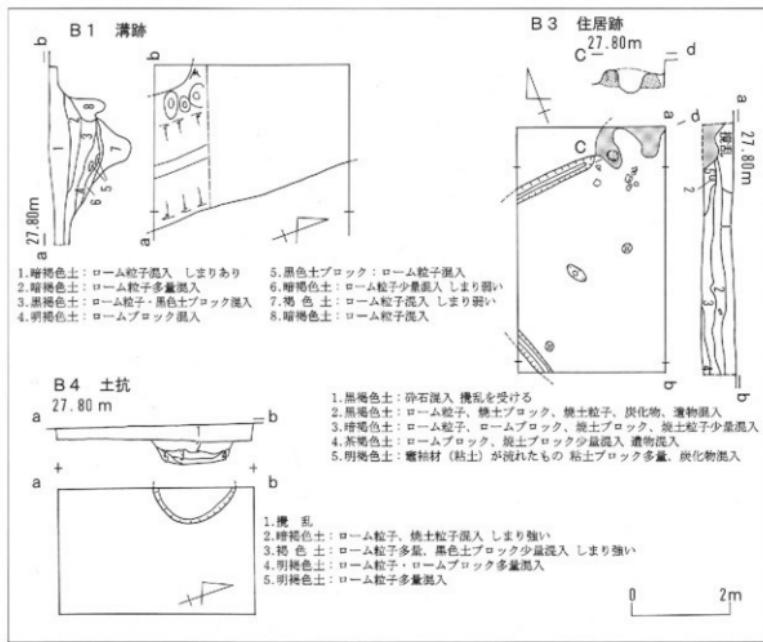
本遺構は、堅穴式の遺構であると推定されるが、形状等が確認できないため性格は不明である。時期は、覆土内から出土した土器から判断すれば古墳時代後期と考えられる。

B1溝跡

B1溝跡は、地表面から約20~40cm下で確認した。幅約2.80mで、ほぼ南北方向に延びている。調査区の南西隅部に地山（ローム層）が確認され、溝はそこから西側へ曲がる状況を呈している。調査区南辺に幅1mのトレーナーで断面を確認したところ、溝の東面は緩やかに掘り込まれ、底近くで急に落ち込み底面は丸みを帯びている。西面は底からやや急角度で立ち上がり、上半部に径約30~50cm・深さ約50~60cmのピットが3基連続して検出された。溝の深さは約2.60mを測る。土層は暗褐色土を主体とし、西側から流れ込んだ状況を示す自然堆積である。遺物は、覆土中から土師器壺、甕片が少量出土しているが、明確に遺構の時期を判断できる出土状況は認められなかった。

B3住居跡

B3住居跡は、調査区の北東隅部に竈の両袖部、北側に北壁の一部及び壁溝、南西隅部に西壁の一部及び壁溝を確認することができた。竈は住居跡の北壁に設置されており、竈を中心とすれば一辺7~8mの規模を持つ堅穴住居跡と推定される。主軸はほぼ北を向いている。覆土上層が擾乱を受け竈上面も消失しているが、住居跡の深さは約60cmを測る。土層は黒褐色土を主体とした自然堆積である。床面は良好でピットが3基確認できた。竈は両袖部分を確認したが、黄褐色粘土で構築され、補強材として左袖内に土師器甕の上半



第4図 B区遺構実測図(1/100)

部(7)が逆位で埋め込まれていた。焚口から竈内部には焼土と灰が厚く堆積していた。遺物は、竈周辺の床面から土師器壺(8)、覆土内から黒彩を施した土師器壺(6)の他、甕、瓶片等が出土している。本住居跡の時期は出土土器から古墳時代後期と考えられる。

B4 土坑

B4土坑は、調査区の西辺際、地表面から約30cm下で約1/2を確認した。形状は円形を呈し、直径約1.6m、深さ約40cmである。土層は自然堆積で、出土遺物はなく、遭構の時期、性格は不明である。なお、調査区の南東部分で硬化面が認められた。調査区内からは、赤彩を施した土師器壺、脚部片が出土している。

C1住居跡

C 1 住居跡は、地表面から約30cm下で遺構の北西部を確認した。形状は方形を呈するが、規模は推定できない。深さは約10cmと浅く、遺構の上部は削平されている。西壁は、住居跡の北西隅から約 1.7m の所で外へ拡がる状況を呈している。床面はやや軟弱である。覆土は暗褐色土で炭化物が混入している。遺物は、土師器杯、甕の小片が僅かに出土したのみで、本遺構の時期を判断できるものではなかった。

C2 溝跡

C2溝跡は、地表面から約50cm下で確認した。ほぼ南北方向に延び、幅は調査区の北辺で約1.90m、南辺で約1.20m、深さは確認面から約80cmである。底面は平坦で幅約60cmを測り、断面は逆台形を呈している。土層は、暗褐色土と黒褐色土を主体とした自然堆積である。遺物は、覆土内から土師器壺、甕、瓶(12-13)

の他、土師質土器片が出土した。土師器壺には、黒彩を施したもの(9)が出土している。本遺跡の時期は、出土土器から古墳時代後期と考えられる。なお、溝跡西側の広い範囲に硬化面が認められた。

C 4 土坑

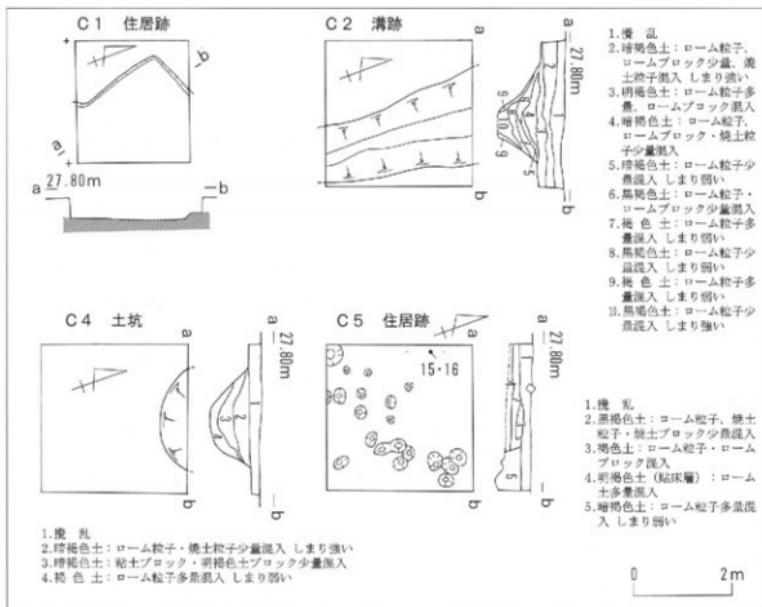
C 4 土坑は、調査区の北辺際、地表面から約25cm下で約1/3を確認した。形状は円形を呈し、確認面での直径約2 m、深さ約80cmである。土層は暗褐色土の自然堆積で、出土遺物は認められず時期は不明である。

C 5 住居跡

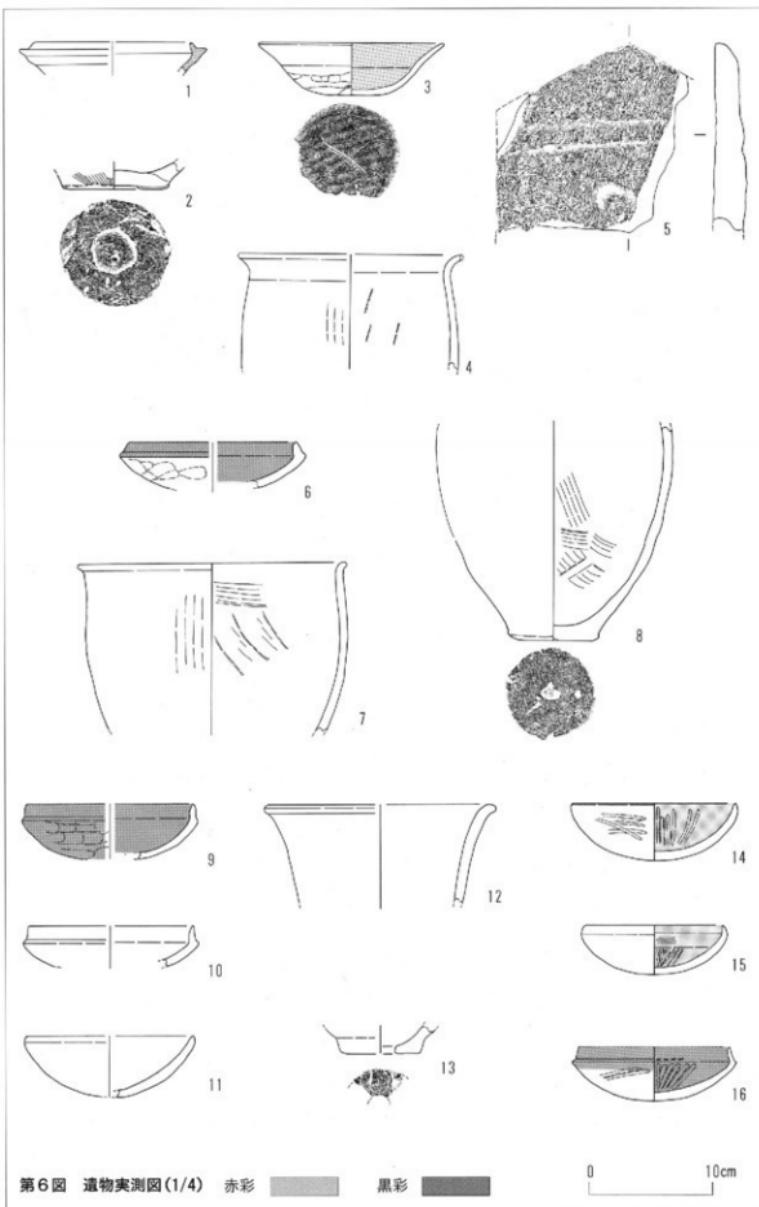
C 5 住居跡は、地表面から約20cm下で確認した。調査区全面が覆土のため、遺構の形状、規模は不明である。深さは、調査区の上層が擾乱されているため、残存する覆土の厚さは20cm以下である。床面は良好で多数のピットが検出された。遺物は、調査区西辺際の床面上から土師器壺で赤彩を施したもの(9)と黒彩を施したもの(9)が上下に重なって出土した。他に覆土内からも赤彩を施した土師器壺や甕、土師質土器片等が出土している。本遺構は、遺構の調査状況から竪穴住居跡と判断され、時期は出土土器から古墳時代後期と考えられる。

遺構外出土遺物

遺構に伴わないと判断された遺物では、繩文土器や石製品、板碑片が出土している。繩文土器（図版5-6）は小片であるが、纖維を含んだ前期のものが多く、僅かに中期の土器も出土した。石製品（図版5-7）は磨石や石錐等が出土した。中世の遺物としては、土師質土器片の他、綠泥片岩製の板碑の上部片がA 5 区から出土している。二条線が認められるが、種子は大部分が欠損している。



第5図 C区遺構実測図(1/100)



第6図 遺物実測図(1/4) 赤彩

黒彩

0 10cm

主な出土遺物観察表

法量単位: cm ()は推定値又は現存値

番号	出土点	遺物名	口径	径	色	胎	調査	写真	
		器種	部位	底	燒		土成	図版	
1	A 2 区 確認面 環	須恵器 口縁部	(12.8)	-	灰色	砂粒混入	良好	ロクロ成形 口縁部は内傾して立ち上がり、口唇部でやや外反 体部との境に明瞭な稜有り	5-1-3
2	A 2 区 履土内 壁	土師器 甕	-	8.6	黃褐色	大粒砂粒混入	良好、外面一部黒色	平底で底面の中央部が窪む 外面部方向のハラ磨き 内面横方向のヘラ磨き	4-1
3	A 4 区 履土内 壁	土師器 甕	15.2 5.6 6.1	-	暗褐色、内面赤色	砂粒僅かに混入	良好	底部は丸底で体部は内彎口縁部で外反、内面に弱い稜を有す 口縁部から体部中位まで内外面とも横ナデ後横方向のヘラ磨き 体部中位から底面にかけて外側はヘラ削り、内面はヘラ磨き *内面全面赤彩 *底部縁に粗圧痕、底部中央に「x」印の刻畫	4-2
4	A 4 区 履土内 甕 口縁～ 胴部片	土師器 甕	(18.0)	-	赤褐色	内面暗褐色	砂粒混入 良好	口縁部は外反し肩部最大径は口径とほぼ同じ 頸部から口縁部にかけて内外面とも横ナデ 肩部外面は縱方向のヘラ削り、内面は横方向のヘラナデ	5-3-1
5	A 5 区板 確認面上部片	磚	現存高 (15.3)	縫泥片岩 厚み2.0～2.5	-	-	-	二条刻線 種子は阿弥陀如来か	5-5
6	B 3 区 住居跡 覆土内 壁	土師器 甕	(13.6) (3.8)	-	褐色 緻密 良好	外面部黒色	底部は丸底では体部は内彎し口縁部との境に稜を有す 口縁部は内傾、口縁横ナデ 体部ヘラ削り 内面は横ナデ *口縁部外面から内面全面にかけて黒彩	5-2-1	
7	B 3 区 住居跡 竈左袖 上半部	土師器 甕	22.0 (13.8)	-	赤褐色 大粒砂粒多量混入	内面黒褐色 不良	二次被熱 非常に多い	胸部から口縁部にかけて僅かに内彎し口唇部で強く外反 肩部最大径は口径とほぼ同じ 口縁部外面とでも横ナデ、腹部内面縱方向のヘラナデ 肩部外面縱方向のヘラ削り、内面斜方向のヘラナデ	4-3
8	B 3 区 住居跡 竈周辺 下半部	土師器 甕	(17.4) 7.4	-	赤褐色 砂粒多量混入 やや不良	-	-	平底で胸部は張りが弱く緩やかに内彎 外面部方向のヘラ削り、底部縁から底面にかけて焼土及び灰付着 内面胴上半は縱方向のヘラナデ、胴下半は横方向のヘラナデ	4-4
9	C 2 区 確認面 壁	土師器 甕	(13.6) (4.5) (4.6)	-	黒褐色 緻密 やや良好	-	-	底部は丸底で体部は内彎し口縁部との境に稜を有す 口縁部は垂直、外面は口縁横ナデ、体部ヘラ削り、 内面は横ナデ *内面全面黒彩	5-2-6
10	C 2 区 溝跡 覆土内 壁	土師器 甕	(13.5) (3.5)	-	淡褐色 緻密 良好	-	-	底部は丸底で体部は内彎し口縁部との境に稜を有す 口縁部は垂直、外面は口縁横ナデ、体部ヘラ削り、 内面は横ナデ	5-2-4
11	C 2 区 溝跡 覆土内 壁	土師器 甕	(13.8) (5.0)	-	淡褐色 緻密 良好	内面黒褐色 外面部黒色	-	底部は丸底で体部にかけやや内彎し口縁部でほぼ垂直に 立ち上がる、外面部縁から体部上半横ナデ後ヘラ磨き、 体部下半ヘラ削り、内面横ナデ	5-2-3
12	C 2 区 溝跡 最下層 口縁～ 胴部片	土師器 甕	(19.0) (7.8)	-	淡褐色 砂粒混入 良好	内面黒褐色 外面部黒色	-	胸部から口縁部にかけ外傾し口唇部で僅かに外反 口縁部外面とでも横ナデ 胸部横ナデ後ヘラ磨き（外面は横と縱、内面は横方向）	5-3-6
13	C 2 区 溝跡 覆土内 底部	土師器 甕	(6.6)	-	褐色 砂粒混入 良好	内面黒褐色 外面部黒色	-	平底で底面の孔径は推定 2.2 cm 内面横ナデ 底面に木葉痕	5-3-14
14	C 5 区 住居跡 覆土内 壁	土師器 甕	13.4 4.7 6.4	-	赤色 砂粒混入 良好	底面黒色	-	底部は丸底で体部にかけ内彎し口縁部でほぼ垂直に立ち上がる 外面部縁から体部横方向のヘラ磨き、底面ヘラ削り 内面縦方向のヘラ磨き *外面部縁から体部及び内面全面赤彩	4-5
15	C 5 区 住居跡 床面上	土師器 甕	11.2 4.0 7.4	-	赤色 砂粒多めに混入 良好	底面黒色	-	底部は丸底で体部にかけ内彎し口縁部で僅かに内傾する 外面：口縁部横ナデ後横方向のヘラ磨き 体部横方向のヘラ磨き、底面ヘラ削り 内面：口縁部横ナデ、体部上半横方向のヘラ磨き 体部下半から底にかけ縦方向のヘラ磨き *外面部縁から体部及び内面全面赤彩	4-6
16	C 5 区 住居跡 床直上	土師器 甕	12.4 4.4 7.4	-	褐色 緻密 良好	-	-	底部は丸底で体部にかけやや内彎し口縁部との境に稜を有す 口縁部は内傾、口縁部内外面とも横ナデ後横方向のヘラ磨き、 外面部ヘラ削り後横方向のヘラ磨き、底面ヘラ削り、内面縦 方向のヘラ磨き *外面部縁から内面体部上半にかけ黒彩	4-7

5.ま　と　め

今回の調査は、調査期間が4日間という短期間であったこと、また調査区が限られた範囲の調査であったことから充分な調査であったとは言えないが、当初奈良・平安時代の遺跡と考えられていたものが、縄文時代、古墳時代、中世にかかる遺跡であることが確認された。特に、古墳時代後期の堅穴住居跡が少なくとも3軒以上確認され、当時の集落の存在が明らかになったことは大きな成果であった。また出土遺物では、土師器壺の赤彩が施されたもの、黒彩が施されたものが、高い割合で出土していることが注目される。当地方の古墳時代を研究する上で、貴重な資料を得ることができたものと考える。

いくつかの課題は残されたが、今回の調査にあたりご理解、ご協力いただいた理化工業（株）の関係者の方々には厚く御礼申し上げる。また、暑い中を調査に参加ご協力くださったみなさんに感謝申し上げる次第である。

図版1 遺跡・遺構（A区）



遺跡全景(南西側から)



A 2区



調査前 調査区全景(南側から)

図版2 遺構(B区)



B 1 溝跡確認状況



B 1 溝跡断面



B 3 住居跡カマド確認状況



B 3 住居跡カマド全景



B 3 住居跡全景



B 4 土抗全景

圖版3 遺構(C區)



C 1 住居跡全景



C 4 土坑全景



C 2 溝跡全景



C 2 溝跡断面

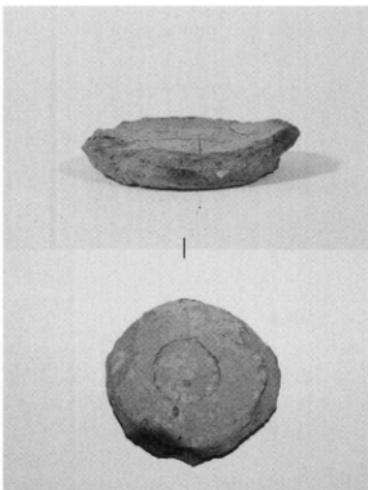


C 5 住居跡全景

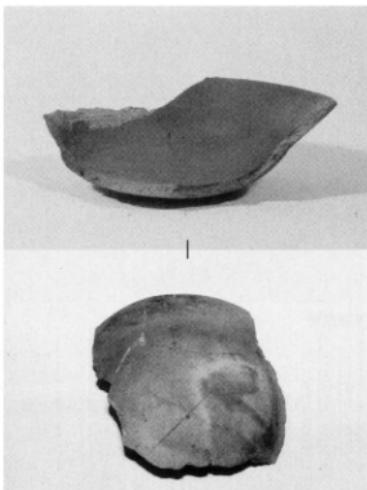


C 5 住居跡遺物出土狀況

図版4 遺物



1 土師器甕底部(A 2区)



2 土師器坏(A 4区)



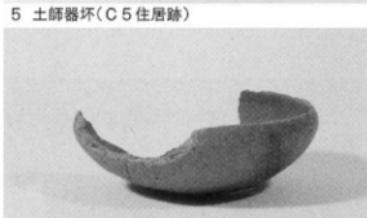
3 土師器甕(B 3住居跡)



5 土師器坏(C 5住居跡)



4 土師器甕(B 3住居跡)

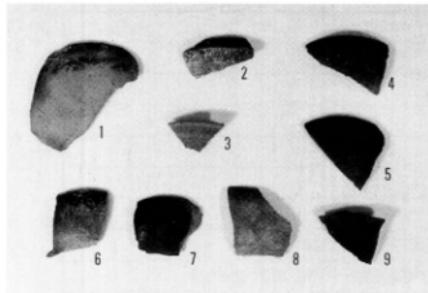


6 土師器坏(C 5住居跡)

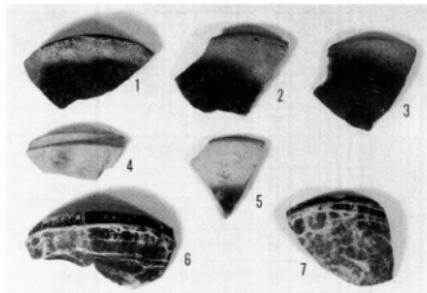


7 土師器坏(C 5住居跡)

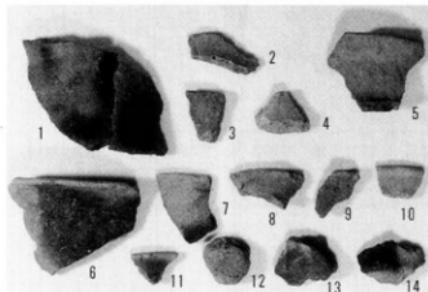
図版5 遺物



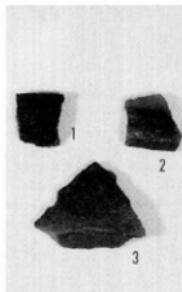
1 土師器底 1, 2(A 2区) 4~9(A 4区)
須恵器蓋 3(A 2区)



2 土師器底 1(B 3住居跡)
2~7(C 2溝跡)



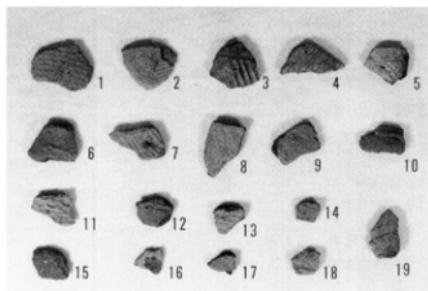
3 土師器底 1~4(A 4区) 5(C 5区)
6~14(C 2溝跡)



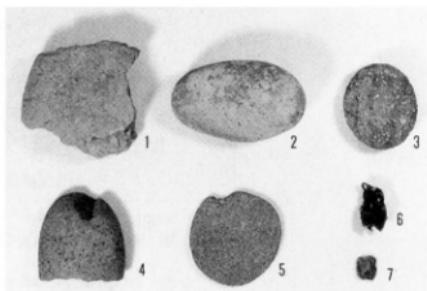
4 土師質土器鍋
1, 2(C 2区) 3(C 5区)



5 板碑(A 5区)



6 橋文土器 A 1区:5, 14, 18 A 2区:16
B 1区:3, 17 B 2区:19 B 3区:1, 9, 12 B 4区:8
C 2区:2, 4, 7, 11 C 4区:6, 10 C 5区:13, 15



7 石製品 1~3(B 1区) 4, 5(C 2区)
剝片 6~7(A 4区)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	きゅうかくしきょうがこうついせき						
書名	旧中結城小学校庭遺跡						
副書名	理化工業(株)敷地内の調査						
卷次							
シリーズ名	八千代町埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	11						
編著者名	山野井 哲夫						
編集機関	八千代町教育委員会 生涯学習課 文化係 (歴史民俗資料館内)						
所在地	〒 300-3572 茨城県結城郡八千代町大字菅谷 1017-1 TEL 0296-48-0525						
発行機関	八千代町教育委員会						
発行年月日	西暦 2002年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
旧中結城 小学校庭遺跡	茨城県結城郡 八千代町大字 佐野字古屋敷 ・字北沼	市町村 08521	遺跡番号 108	36度 11分 45秒	139度 53分 22秒 ～ 20000728 20000801	175	工場建設に 伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
旧中結城 小学校庭遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 中世	土抗 竪穴住居跡 溝跡	2基 3軒 2条	縄文土器、石製品 土師器・須恵器 土師質土器、板碑片	古墳時代後期の竪穴 住居跡が確認された	

八千代町埋蔵文化発掘調査報告書11
旧中結城小学校庭遺跡

－ 理化工業(株)敷地内の調査 －

平成14年3月31日発行
編集 八千代町教育委員会 生涯学習課 文化係
(歴史民俗資料館内)

発行 八千代町教育委員会
印刷 八千代印刷有限会社